

夢と邪霊

昭和七年四月の或日午後三時頃電話が掛つて来た。すぐ来て貰ひたいといふので、私は早速その家へ赴いた。その家は相当の資産家で、その妻女の難病を治してから間もない頃であつた。その妻女に面会するや彼女は口を開き『実は先刻ウツラウツラ居眠りをしてゐると不思議な夢をみた。それは真黒な人間の如きものが私に向つて強い言葉でいふには「お前は岡田を近づけてはいけない、アレを近づけると今にお前の家の財産を捲上げられて了ふから今の中放れてしまへ。」と言ふので、私は「否、それは出来ません。私が十数年来悩んだ病気を治して下さつたのだから、絶対放れる訳にはゆかない。」といふと黒い影は怒つて「ヨシそれでは斯うしてやる」と言つて喉を締めつけたので、私は吃驚して眼がさめた処が驚いた事には、喉を締める際、指の爪で強く押した為、目が醒めた今でも爪の痕が痛い。』といふので見ると驚くべし、アリアリと爪の痕が着いてをり、赤く腫れてゐるのである。考えるまでもなく夢中で押さ

れたそれが現実に肉体に傷ついたといふ事は何と不思議ではないか。之は霊が体と同じ働きをした事になるので、私は身震ひしたのである。之と同じような実例が今一つある。

或日の早朝電話がかかって、すぐ来て呉れといふので早速その家へ駆けつけた。見ると其家の二十歳位の令嬢が臥床してゐた。此令嬢は非常に弱かったのを私が健康にしてやったのである。訊いてみると之も不思議な話である。令嬢曰く、「朝まだき夢をみた。それは以前一寸知り合つてゐて、数ヶ月前死んだ某青年である。夢の中で此青年がイキナリ自分を目掛けてピストルを放つたので眼がさめた。すると不思議や身体中が痺れて動けない。而も心臓の中に弾丸が入つてゐる様に思はれ、多量の出血があるような感じであるから胸を見て呉れ。」といふのである。私は見たが何ともなつてゐない。早速靈的治療を施し、心臓から弾丸の霊を撮み出してやったので大分快くなったが全治はしない。私は時間が経てば治るといつて歸つた。その夕五時、私宅で祭典があつたので、『治つたら来なさ

い。』と言った処、幸ひにも五時頃平常の通りで参拝に來たので、私も安心したといふ事があつた。

右両例とも邪神の妨害であつたのは勿論である。前者は私から離反させんが為、後者は祭典に参拝不能にさせようとした為である。